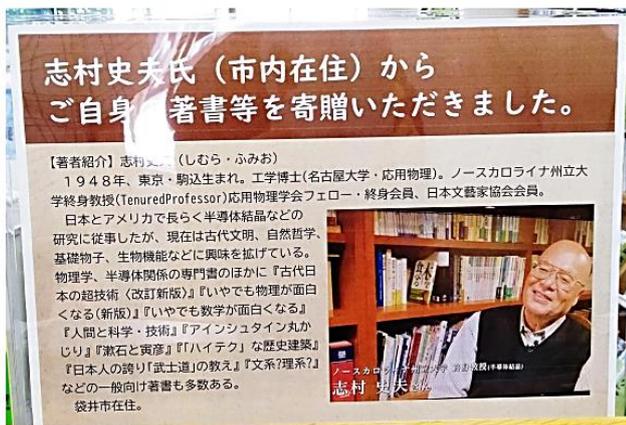


あなたはいまを愉しんでいますか？

●先輩お二人の「終活」から学ぶ！

先日、浦高先輩のお二人から「終活」に関するお便りをいただきました。

お一人目は、高 19 回の志村史夫様です。「終活」の一環として退職後約 5 年間をかけてご自身が綴られた著作物（書籍を除く）の PDF 化を進められ、ほぼ完成されるとともに、ご自宅にあった御著を居住地の図書館や麗和文庫（浦高同窓会文庫）に寄贈されています。今回は、袋井市立図書館で 6 月 18 日～7 月 25 日まで開催されている「志村特集コーナー」の写真をお送りいただきました。



袋井市立図書館・志村特集コーナー(2022.6.18～7.25)



志村様が出版された書籍は多岐にわたり 200 冊近くになるのでしょうか。浦高同窓会でも『ハイテク国家・日本の「知的」選択』（講談社、1993）、『五重塔の日本』（東明社、1996）、『寅さんに学ぶ日本人の「生き方」』（扶桑社、2008）、『漱石と寅彦 - 落椿の師弟 -』（牧野出版、2008）など 11 冊の書籍を 4 月に寄贈いただきました。ありがたいことです。

◇ ◇

もうお一方は、春日部地区浦高会会員でもある松本伸一様（高 13 回）のご長男・松本祐一様からいただいた『松本伸一作品集 陶芸を見つけた道 いま生きて在ることを愉しみ歩む』（自費出版）です。

祐一様のお手紙には……。



「この度、父が『松本伸一作品集 陶芸を見つけた道 いま生きて在ることを愉しみ歩む』を自費出版いたしました。この作品集は、父の作品の紹介だけでなく、40 年近く創作を続けて来たアマチュア

陶芸家としての軌跡をまとめています。皆様もご存じのとおり、父は多系統萎縮症という難病を 2020 年に発症し、今も病氣と闘っています。（中略）この作品集は、病気で陶芸を諦めざるを得なかった父に何かできないかというところから企画し、自分史制作を手がける出版社にお願いして制作したものです。病状が予想以上に早く進むなか、何度も取材を受けて執筆していただいたものです。父の語る言葉のなかには、人生への向き合い方、そして、お世話になった皆様への感謝のメッセージがあらわれていると感じます。ご一読いただければ幸いです」とありました。



作品集には、「日本陶芸倶楽部の創立 50 周年記念作品展の人気投票で 1 位に輝いた吹き墨の 3 枚の絵皿で表現した『真夏の夜の夢』から始まり、思い出の作品が並びます。そして、自分史は以下に……。

はじめに 松本祐一

第一章 「つくる」こととの出会い

野田の家の記憶／好きな製図で家を増築／後の人間国宝のもとで木工を習う／夢を失くし、模索した大学時代

第二章 陶芸を見つけた道

キッコーマンに就職、曲折を経て／広報の仕事がもたらした出会い／再び人事部へ、人材教育の体系を作る／陶芸につながる 3 本の糸／日々の生活を大事にする／「太虚窯」の開窯～アマチュアに徹する

第三章 日々暮らすまちを豊かに

野田青年会議所の思い出／「NPO 法人そい・びーんず」誕生／夫婦で自立した暮らしを

第四章 寄稿 伝えたいこと

友人・中村晋也／妻・松本和子／長男・松本祐一／長女・松本亮子

おわりに 松本伸一

「はじめに」で祐一様は次のような言葉を……。

「この本は『アマチュア陶芸家 泥伸（でいしん）』こと、父・松本伸一の作品集です。父がつくった作品をまとめただけでなく、その作品を生み出した父の人生の軌跡が語られています。（中略）こうやって素晴らしい写真と父の語り口を再現した素敵な文章をみると、つくってよかったと思います。そして、父が生涯をつうじて陶器だけでなく、食品メーカーの企業人としての『作品』、野田を愛するまちづくりの『作品』、そして、家族という『作品』を丁寧に大事につくりあげてきたのだということであらためて感じます」と。息子さんが父親を理解し、そして陶芸だけでなく、仕事を「企業人としての作品」、社会活動を「まちづくりの作品」と理解され、そして「家族という作品」と最大限の賛辞を贈られているのが羨ましい限りですね。さらに第四章で祐一様はこう綴られています。

「この作品集をつくる過程で、父のことを改めて知ると、今の私は父に似ています。昔だったら、そのことを否定していたでしょう。でも、今は血縁や継承といった大げさな話ではなく、純粹にその『つながり』に不思議な安心のようなものを感じています。そして、その『つながり』を大事にしながら、私も家族という『作品』を妻や子どもたちとつくっていきます」と。



「おわりに」で松本伸一様は次のように綴られています。[2021年2月ご家族4人での箱根旅行写真]

「広報、まちおこし、陶芸——これらは私の人生を支え、豊かにしてくれた3つの幹です。人生を愉しむことを教えてくれたとも言えます。愉しむことの大切さは、趣味の読書からも学びました。

広報部時代に、作家の城山三郎氏と仕事をする機会に恵まれ、昼食のご相伴にあずかったことがありました。私の自宅の本棚には20数冊の著書がありましたが、迷わず『粗にして野だが卑ではない』の一冊を選んで持参し、サインをお願いしました。元国鉄総裁の石田禮助の伝記で、城山氏の綿密な取材と虚飾のない文章で書かれた石田氏の飄々とした生き方に共感を覚えていたからです。明治生まれの実業家で、古武士のような佇まいと私心を持たない志の高さ、強い信念とユーモアを持った人生の達人でした。

このような人物は石田氏以外にもいます。石田氏の親友・石坂泰三、昭和を代表する辣腕経営者・土光敏夫、キックマンの中興の祖・茂木啓三郎など、すぐに名前を挙げられます。彼らに共通するのは、仕事上の実績もさることながら、人生を大事に愉しんでいたということです。石田氏は農作業、そこから採れる新鮮な野菜、さらに株取引、孫、プランデーなどエピソードに事欠きません。こんな爺さんと親父のようにゆっくり話をしてみたいものです。

もう一人、作家では辻邦生氏にも随分影響を受けました。初版本は全部持っているはずですが。その歴史小説の一つに『嵯峨野明月記』があります。桃山時代、京都嵯峨野において本阿弥光悦、俵屋宗達、角倉素庵が『嵯峨本』の刊行に情熱を燃やす物語です。宿命を甘受して生の意味を求める書家の光悦（優れた陶芸家でもありました）、自分の心をひたすら絵筆に込める画家の宗達、学問と事業の狭間で懊悩する素庵、3人の独白で構成された独特な小説です。辻氏はこの著作について次のように述べています。

「〈地上に在る〉ことは文句なしに素晴らしいが、これは、死に縁どられ、死によってやがて消される果敢なさのゆえではない。（中略）すくなくとも宗達の活力には、死をさえ楽しもうとする底なしの陽気さ、弾み、疲れなさがある。（中略）私を思わず腹の底から哄笑させた力・この、死までを喜んで取り入れた全体的肯定感・をいつか作品にすることができたら」このように解題しています。ちなみに、我が家の窯の名前である「太虚窯」は、光悦の庵である「太虚庵」からいただいたものです。

こんな読書をしていると、自分の日々の在り方を嫌でも考えてしまいます。私の生活信条は「いま生きて在ることを愉しむ」です。「生かされている」と言うとは絶対的な存在を考えてしまうし、「生きている」と言うとは自分の主体的意思を感じてしまう。そうではなく、自分がいま現在、生きている存在そのものを愉しみたい（楽しむ、ではありません）。迷っている自分、苦労している自分、解放されている自分、それらを全部ひっくるめて、いとおしく思う。そんな余裕をいつも心に秘めておきたい。随分前からそう在りたいと思ってきましたが、そこが凡人、毎日がゆっくりくることばかりです。

あなたは、いまを愉しんでいますか？

2021年10月吉日

松本伸一

◇ ◇

「終活」というとモノや資産を整理する「断捨離」のイメージを持たれる方も多いのではないのでしょうか。私も離れの物置に溜め込んでいたさまざまな書類、書き残してきた冊子などを随分と処分してきました。しかし、志村先輩や松本先輩のように、ライフスタイルを見直してこの先の人生を実りあるものにするための活動なのですね。私も「終活」を常々始めようと思のですが基本は「いまを愉しみながら」ですね。